わたしの・ぼくの・郷土

千丁町立千丁小学校　六年　中田竜一

ぼくの郷土千丁町。昭和五十一年九月一日、熊本県で一番新しく生まれた人口七千四百人の農業を中心としたとても豊かな町である。

遠くに不知火海を望み、東に竜峰山を眺め広々とした沃野がどこまでも続く平坦な水田地帯である。

農業が町の八〇％をしめ畳表の原料であるい草の生産は、日本一として全国的に知られている。い草の伝来は知らないが、町の北東にある岩崎神社は、い草の神様として祭られ千丁町の守り神としてあがめられている。

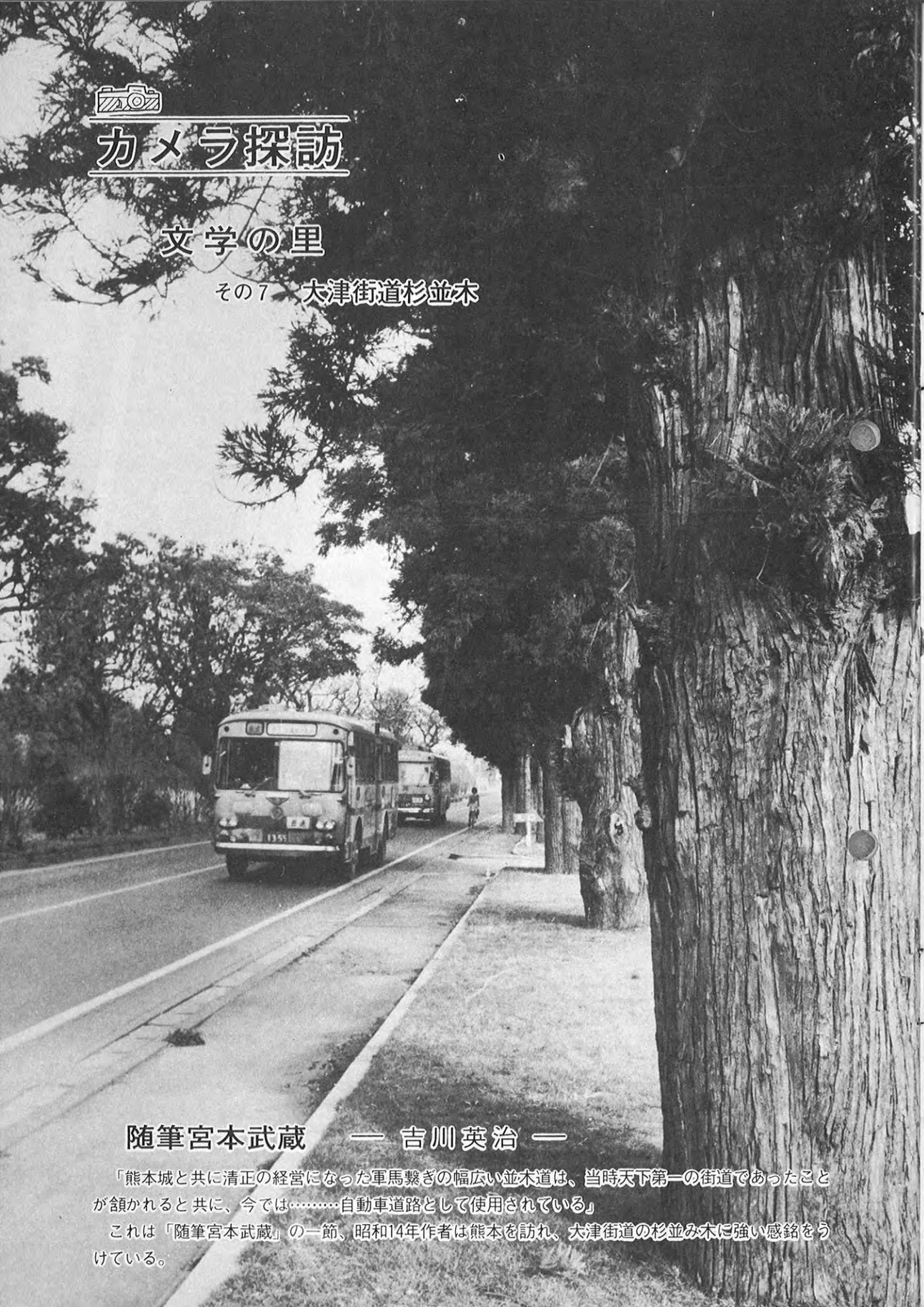
い草は、冬の最も寒い時期に植えられ、真夏にかりとられる。農家の人達の苦労は、言葉には、表現できない重労働である。でも千丁町の人達は、それにたえうる忍耐がある。

倉庫から大きなトラックが東京、東北方面に畳表を満さいして出る光景は、とてもすばらしくほこりに思う。

さらに豊かさを示すものとして町の中心にある小学校、中学校、公民館は鉄筋コンクリートつくりの堂々たる建物で、他に見ることができない立派なものである。

町の一番西に、八代新地という地区がある。百五十年前、海を干拓して出来た地区で、その当時干拓と合わせて樋門を作りそれを大ざや樋門と言っている。その工事の時、人夫が歌った「大ざや節」は郷土の民ようとして今でも伝わっており、毎年の運動会には、当時をしのび、五年生が父兄と一緒に踊ることになっている。

千丁町には、大きな工場もないし公害もない。澄みきった空のもとで川魚が泳ぎ、それを釣る人ののどかな姿は、千丁町でなければ見られない風景である。こんな静かで平和な町を今後ぼく達が受けつぎ、郷土を愛し、千丁町出身者としてのほこりを持ち、ますます発展するようがんばりたいと思う。



カメラ探訪

文学の里

その7　大津街道杉並木

随筆宮本武蔵　— 吉川英治 —

「熊本城と共に清正の経営になった軍馬繋ぎの幅広い並木道は、当時天下第一の街道であったことが頷かれると共に、今では……自動車道路として使用されている」

これは「随筆宮本武蔵」の一節、昭和14年作者は熊本を訪れ、大津街道の杉並み木に強い感銘をうけている。